共和党右派とダグラス・マッカーサー大統領候補擁立運動

井口治夫

【要約】ダグラス・マッカーサーは、政治的野心はあり、特に終戦後の擁立運動では大統領候補になることに関心はあったものの、こうした運動を、自身が直面する軍事的・政治的課題を後押しするための米国政権に対する圧力として利用していったのであった。ここではマッカーサーの信任が厚かったボナー・フェラーズの文書を利用することを中心にここまで述べてきたマッカーサー擁立運動について分析する。フェラーズ文書から判明したことは、一九三〇年代（フィリッピン時代）以来マッカーサーに大変信頼されていたフェラーズが、前線のマッカーサーと米国内の共和党右派との重要なパイプ役をはたしていたことであった。それから、フェラーズとキャロル・リース下院議員との盟友関係から判明したことは、一九四八年の大統領選にむけたマッカーサー擁立運動は、ドイツ敗戦直後、つまり太平洋戦争末期に始まっていたのであった。このことは、これまでの研究で解明されていないことである。最後に、結論で述べているが、先行研究は、マッカーサーが大統領になる意欲を誇張しており、ロバート・ウッドの文書はその点を裏付けている。

史林　九二巻五号　二〇〇九年九月

はじめに

共和党右派の大統領候補の流れは、ハーバート・C・フーヴァー大統領（カリフォルニア州が活動の中心地）、ロバート・タフト連邦議会上院議員（オハイオ州選出）、バリー・ゴールドウォーター連邦議会上院議員（アリゾナ州選出）、ロナル

ド・レーガン大統領（元カリフォルニア州知事）という順番で捉えられている。共和党右派は、フランクリン・ローズヴェルトが推進したニュー・ディール政策が、大きな中央（連邦）政府と中央政府の経済と社会への介入を拡大させるという観点から反対で、外交政策では、ローズヴェルトが三期目以降推進した国際政治への対応に批判的であった。彼らは、支持基盤を北東部を中心におく共和党穏健派と比べて、支持基盤の中心を中西部と西部に置き、ローズヴェルトの米国参戦後の外交政策に歩みよる共和党穏健派と対立したのであった。共和党右派は、タフトが一九五二年の共和党大統領候補者指名争いで共和党穏健派が擁立したドワイト・アイゼンハワーに敗れるまでの一二年間、同党の主導権をえた共和党穏健派が支持するトーマス・ドゥィーやウェンデル・ウィルキーをはじめとする政治家への対抗馬として、カリスマ性の弱いタフトを本命として支持していた。ただし、一九四四年と一九四八年の大統領選挙では、共和党右派は、一般有権者の間でも知名度が抜群でカリスマ的イメージの強い軍人ダクラス・マッカーサーを共和党内の妥協の大統領候補に擁立する運動を展開したのであった。前者では、共和党右派が本命候補として注目していたタフトが上院議員の再選を選択したことが背景にあった。共和党右派は、タフトが共和党大統領候補として支持したタフトの地元の州知事ジョン・ブリッカーについては、タフト以上に大衆的アピールに欠けた彼を候補として擁立することに消極的であった。マッカーサーを支持するグループは、一九四〇年夏の共和党大会のように、一位トーマス・ドゥイー、二位タフト、三位ウェンデル・ウィルキーという初回の大統領候補選定投票結果以降、何回も再投票を行った末に三位のウィルキーが指名にこぎつけた苦い思い出があり、一九四〇年の大会と同様の紛糾した事態を打開できうる人物として、マッカーサーに目をつけていた。

マッカーサーは、日米開戦前から、米国世論に多大な影響力を持つ出版社タイム・ライフ社の創業者ヘンリー・ルースとその妻クレアのような共和党穏健派にも人気があった。日米開戦直後、太平洋戦線で、米軍が敗北と撤退をするなかで、マッカーサーが指揮するフィリッピンのコレヒドールにおける三ヶ月以上にわたる籠城戦による奮戦は、米国民に数少ない希望を与えたのであった。米国参戦後の最初の英雄の誕生であった。この戦いは、大統領の命令により、マッカーサー

とその側近たちはオーストラリアへの脱出を行い、その後は米比軍の降伏という結末を迎えた。マッカーサーの豪州からの巻き返しは、米軍の太平洋戦線における巻き返しのストーリーとして、米国内のマスコミは盛んに取り上げ、マッカーサーは米国内で根強い人気を保った。バターンとコレヒドールでの死闘が繰り広げられる最中、有力共和党右派の連邦上院議員（ミシガン州選出）アーサー・ヴァンデンバーグは、二月上旬家族宛の書簡で、もしもマッカーサーが生還した場合、彼を一九四四年の大統領選における共和党大統領候補に擁立する見解を示唆している。ヴァンデンバーグは、ドゥイーやウィルキー、特に後者を敵視していた。

戦時下における軍人を大統領候補に擁立する政治運動には先例があった。南北戦争のさなか、リンカーンの再選を阻止するため、リンカーンに解任された連邦軍総司令官ジョージ・B・マクリーランを一八六四年の民主党大統領候補に擁立する動きがそれであった。

マッカーサーの場合、戦後も共和党右派が擁立運動を継続したことは特異である。同派は、一九四八年の共和党大統領候補者指名争いにおいて、彼らが本命候補として考えていたタフトと、共和党穏健派が支持する候補との間で、指名争いが膠着状態になった場合、マッカーサーを担ぎ出すべく政治運動を続けていた。一八八〇年生まれのマッカーサーは、当時としては大統領候補者にするにはかなりの高齢であった。マッカーサーは、共和党右派の重鎮フーヴァー大統領により当時最年少の陸軍参謀総長に抜擢され、フーヴァー大統領に近かったことが、共和党右派と彼との人脈の原点であった。マッカーサーを擁立する運動の支持基盤は、共和党右派が人脈面で密接に関わった政治団体アメリカ・ファースト委員会（米国の対欧州戦争関与を巡る参戦前の米国内で交わされた激論における不介入派を代表する最大組織）の中心メンバーとそのシンパを中核としていた。一九四八年の共和党大統領候補指名争いでは、マッカーサー擁立運動が挫折していくなかで、共和党右派はタフトを支持した。（タフトは、一九四八年の指名争いでも、一九四〇年のそれと同様、二位であった）

マッカーサーは、政治的野心はあり、特に終戦後の擁立運動では大統領候補になることに関心はあったものの、こうし

た運動を、自身が直面する政治的・軍事的課題を後押しするための米国政権に対する圧力として利用していった。共和党とパイプが太く、また、共和党の大統領フーヴァーの指名で参謀総長になっていた太平洋戦争の英雄マッカーサーは、民主党政権下では、ただでさえ民主党政権から疎んじられるリスクがあった。そうした自分の影響力を確保し、維持するためには、国内政治で民主党政権に対して彼を擁護する支持基盤は有用であった。

本稿は、一九四四年と四八年の大統領選挙に向けて共和党右派が展開したダグラス・マッカーサー擁立運動を分析する。このことを通じて当時のアメリカ政治における共和党右派の動向の解明を目的とした。同時に、マッカーサーの大統領擁立運動に対する認識も検証した。史料としては、マッカーサーの側近ボナー・フェラーズの文書を重視している。フェラーズとキャロル・リース下院議員との盟友関係から判明したことは、一九四八年の大統領選にむけたマッカーサー擁立運動は、ドイツ敗戦直後、つまり太平洋戦争末期に始まっていたことであった。このことは、これまでの研究で解明されていないことである。（先行研究では、ジェームズが一九四六年後半、ションバーガーとシャラーが一九四七年一〇月中旬と指摘している）① 最後に、結論で述べているが、先行研究は、マッカーサーが大統領になる意欲を誇張しており、ロバート・ウッドの文書はその点を裏付けている。マッカーサーは、戦時中も対日占領期も、米国政府に対する影響力あるいは主導権を確保するため、共和党右派による擁立運動を有用であると判断していたのであり、大統領になることについては、あくまでも副次的なものとして位置づけていたのであった。

① D. Clayton James, *The Years of MacArthur: Volume II, 1941-1945*, (Boston: Houghton Mifflin, 1975), 132-141; D. Clayton James, *The Years of MacArthur: Volume III, 1945-1964*, (Boston: Houghton Mifflin, 1985), 195; Howard B. Schonberter, *Aftermath of War: Ame ricans and the Remaking of Japan, 1945-1952* (Kent, Ohio: Kent State University Press, 1992), 52, 73; Michael Schaller, *Douglas MacArthur: The Far Eastern General* (New York: Oxford University Press, 1989), 147. Robert E. Herzstein, *Henry R. Luce: A Political Portrait of the Man who Created the American Century* (New York: Charles Scribner's Sons, 1994), 242-248, 322-333, 335-342.

第一節　共和党右派——第二次大戦参戦前夜のアメリカ・ファースト委員会

大恐慌は、共和党を連邦議会における圧倒的少数派に追いやり、同党内では、一九三二年の大統領選でフーヴァー大統領がフランクリン・ローズヴェルトに大敗を喫したあと、米国北東部を中心とする共和党穏健派が主導権を掌握した。共和党穏健派は、一九三六年の共和党大統領候補指名争いで、フーヴァー元大統領ら共和党右派の反対を抑えて、カンザス州知事アルフレッド・ランドンの指名獲得に成功したのであった。

一九四〇年秋、反ローズヴェルトであった共和党右派や一部の民主党保守派は、大変不満であり、危機感を覚えていたが、彼らは押される一方であった。一九四〇年の共和党大統領候補の選出にあたり、ハーバート・C・フーヴァー（大恐慌勃発後経済の歴史的低迷の責任を負わされ、また、ローズヴェルトとは憎悪の絶交関係にあった）を中心とする、米国中西部や西部にその勢力の中心を置く共和党右派は、米国北東部を中心にその勢力を置く共和党穏健派に政党を乗っ取られてしまった。

一九四〇年一一月の大統領選でローズヴェルトが、インディアナ州出身共和党穏健派の候補ウェンデル・ウィルキーを破ると、建国以来の慣例を破り史上初めて三期目を迎えたが、ローズヴェルトは、その年末に政権がより挙国一致を目指すべく共和党穏健派のヘンリー・L・スティムソン（フーヴァー政権時代の国務長官で、対英国経済・軍事物資支援積極派）を陸軍長官として入閣させた。そして、彼は、「民主主義の兵器庫」を目指すべく、米国の防衛力を増強させながら、ドーバー海峡をはさんでドイツと死闘を繰り広げる英国に経済・軍事物資の援助を推進していったのであった。

共和党右派の多くは、ほかの反ローズヴェルト勢力と連携しながら、米国の対英国経済・軍事物資の援助に制約を加え

ることで、米国が参戦することを回避しようと試み、その最大の山場が、一九四一年二月の対英国武器貸与法を巡る議会における審議であった。この審議では、共和党右派の新しいエースであり、フーヴァーを父親のウィリアム・タフト元大統領と並んで敬愛するオハイオ州選出のロバート・A・タフト上院議員が奮闘し、貸与法の内容に一定の制約を加えることに成功した。

フーヴァーやタフトが主張した対欧州参戦回避の考えをよく反映させたグループとして、NPOの結社アメリカ・ファースト委員会が存在していた。一九四〇年春以降ドイツが欧州で破竹の勢いで勝利していく最中、対英国経済・軍事物資援助をローズヴェルト政権に働きかけていき、同政権のそのような流れを支持していった連合国支援委員会（Committee to Defend the Allies）や、対独宣戦布告も視野にいれた米国外交を主張するセンチュリー・グループ（創始者の一人に少なくとも一九三九年一一月以来戦後米国が英国に代わって世界を指導する覇権国を目指すべきであると主張し、一九四一年夏当時経済担当国務次官補佐として対日経済制裁を決定的にさせたディーン・アチソンがいた）のようなNPOと比べて、一九四〇年九月に結成されたアメリカ・ファースト委員会は、全国的な組織力、会員数と資金力においてこれら団体のどれをも凌いでいた。

アメリカ・ファースト委員会は、その外交・安全保障政策において、欧州および英国の情勢に懐疑的な眼差しを向け、西半球における専守防衛を唱えていた。このグループの支持者は、ローズヴェルト政権が推進してきたニュー・ディール政策を激しく批判してきた。一方、彼らは反共産主義であり、その観点から第二次大戦終了後の米国政府が推進した対ソ連・共産主義封じ込め政策に同意してゆく余地があった。対東アジア政策については、日本の中国における蛮行は非難するものの、日本の対米奇襲攻撃までは極東における日本の覇権を黙認していた。この様な対日評価は、二〇世紀初頭極東における安定勢力としての日本を評価し、東アジアにおけるその覇権を黙認していた共和党の大統領セオドア・ローズヴェルトの思想的な流れを継承していた。

全国的な組織化に成功していたとはいえ、アメリカ・ファースト委員会の支持基盤の中心は、中西部と大平原の諸州であった。このグループの支持勢力の地域的経済基盤は、自動車工業や鉄鋼業というよりは、農業、鉱業、軽工業、商業が中心で、東海岸の重化学工業やウォール街の国際金融と違い、その多くが小規模かつ田舎に所在していた。こうした地域的・経済的基盤の特徴は、第一次世界大戦への米国の参戦は、米国社会に経済的・言論的統制をもたらし、また、東海岸を中心とした国際金融や重化学工業の死の商人たちによりもたらされたという見解と記憶を組み合わせて、次のような委員会の主張を生んだ。――米国の対英国援助、ましてや米国の参戦は、第一次大戦と同様、米国社会の自由、個人主義、こうした価値観を強く信ずる農村部の人口流出の加速化（工業都市や参戦の場合戦地への流出）となり、米国の建国以来の価値観や米国内陸部の経済的利益を犠牲にする。同委員会の支持者の経済的世界観は、米国の経済活動は、米国内あるいは西半球で自給自足的に行えるというものであった。

アメリカ・ファースト委員会のシンパには、同委員会の全国委員ウィリアム・キャッスル（フーヴァー政権の国務次官）を介して委員会と連絡しあっていたフーヴァー、タフトのほか、民主党保守派の連邦上院議員バートン・ウィーラー（モンタナ州選出）、民主党保守派でマサチューセッツ州出身でカトリックのアイルランド系アメリカ人ジョセフ・ケネディー、フォード自動車の創業者のヘンリー・フォード（のちに反ユダヤ人の言動の結果、委員会の名簿からは除名）、共和党右派を支持し、戦間期から一九五〇年代まで全米で最大の購読者数を誇ったシカゴ・トリビューン紙の社主ロバート・R・マコーミック大佐、ボナー・フェラーズ、フェラーズとは陸軍士官学校（ウェスト・ポイント）と陸軍指揮幕僚大学で一期後輩で親しかったアルバート・ウィデマイヤー（軍歴は中将まで昇進し、一九四四年から一九四六年まで蔣介石政権の参謀長兼中国方面米軍司令官をつとめた）たちがいた。ここで紹介したシンパは、フォード（一九四七年死去）とケネディーを除き、一九五二年のタフトを共和党大統領候補に擁立する運動で重要な役割を果たしている。[1]

なお、マコーミック大佐は、共和党右派のなかでは最も保守的な人物であった。フランクリン・ローズヴェルトよりは

一年早くマサチューセッツ州の名門私立学校グロトン（後輩には、ディーン・アチソンや、アチソンと並んで第二次大戦期から冷戦期民主党の外交を担う鉄道王エドワード・ハリマンの息子アヴァレル・ハリマンがいた）に編入学した先輩後輩の関係にあった。在学時期が重なる両者は、学校時代は特に交友関係になく、また、敵対もしていなかった。しかしローズヴェルトが大統領に就任すると、経済政策と安全保障政策を巡って両者は激しい敵対関係になった。マコーミックは、対英国支援に一切反対し、また、米国は専守防衛に徹すべき観点から海軍の増強を防衛能力に限定すべきであると主張していた。マコーミックは、ローズヴェルトもその前任者のフーヴァーも、政府支出を異常に増やしたと痛烈に批判しており、両者を酷評していた。シカゴ・トリビューン紙は、日本の真珠湾攻撃直前の一九四一年一二月四日に、世論を震撼させた報道を行った。それは、大統領の命令で海軍と陸軍が極秘に共同策定していたグローバル視点に基づく対欧州・地中海方面枢軸国作戦計画をスッパぬいたからである。ローズヴェルト政権は、マコーミックの新聞社に一時法的措置をとるかを真剣に検討していたほどであった。また、この作戦計画を描いた中心人物であったウィデマイヤー少佐は、米国の第二次大戦参戦には反対する個人見解で知られていたことから、事件でいち早く疑われたものの、調査結果はシロで、米国参戦後この計画に基づいた米国および連合国軍のグローバルな作戦推進の中心人物となった。それから、この事件では、トリビューン紙にこの極秘情報をリークした流れにウィーラー上院議員が関与していたこと以外は、誰がこの秘密文書をリークしたのかは未だ解明されていない。②

マッカーサー擁立運動との関係では、上記のマコーミック、タフト、フーヴァーのようなアメリカ・ファースト委員会シンパは重要であるが、アメリカ・ファースト委員会の首脳のなかで、同擁立運動との関係で最も重要な人物は、ロバート・E・ウッド全国委員である。ウッドは、マッカーサーより陸軍士官学校で三期上で、長年親しい関係にあり、政治的にも盟友関係にあった。一九二〇年代に准将で退役後米国の農村部の小さな町へのカタログ販売から大手小売チェーンに成長した、全米で二番目の大都市シカゴ市を本社とするシアーズ・ローバック社にスカウトされて、陸軍時代に培ってき

た兵站（ロジスティックス）のノウハウを応用する形で同社の事業をラテンアメリカまで拡大させた中興の祖となり、一九三九年から一九五四年まで同社の会長の座にあった。ウッドは、保守的な有力団体全米製造業者協会（National Association of Manufacturers）の役員でもあり、北東部の経済力に反発していた共和党員であった。彼は、一九三二年の大統領選でローズヴェルトに投票し、ローズヴェルト政権一期目に導入された社会保障制度、農業支援制度、証券取引制度など多くのニュー・ディール政策を支持し、彼の二期目の途中まで支持していた。しかしながら、同大統領の最高裁判所改革案や膨大な赤字財政を生んだ経済政策の行き過ぎが原因となって袂を分かち、以後、強烈な反ローズヴェルト論者となった。ウッド以外に、ウッドを同委員会で補佐した元ウィスコンシン州知事（元進歩党党首）フィリップ・ラフォレットとアイオワ州のセメント会社社長で元在郷軍人会全国委員長ハンフォード・マクニーダー（のちに同委員会副委員長）のほか、シカゴ市の実業家ウィリアム・レグネリー（アメリカ・ファースト全国委員）の息子で出版社社長のヘンリー・レグネリー、同委員会のウィスコンシン州委員長ランシング・ホイトが、のちにマッカーサー擁立運動の中心メンバーになっている。

太平洋戦争中、マクニーダーは准将としてマッカーサーの下で指揮をとり、ニューギニアで戦闘中負傷している。また、ラフォレットは、志願してマッカーサーのいるオーストラリアへ馳せ参じ、彼の広報担当を日本の敗戦直前までつとめた。ラフォレットの父親は、革新主義時代を象徴する連邦上院議員で、米国の第一次大戦参戦に反対した政治家でも知られ、兄のロバートは、父親が在任中急逝した一九二五年以来ウィスコンシン州選出の連邦上院議員をつとめていた。（ロバートは、一九三四年にフィリップが共和党から分離して同州で進歩党を立ち上げると、弟がウィスコンシン州知事に返り咲く一方、彼は進歩党から上院への再選を二回はたした。しかし、フィリップが州知事の再選を果たせなった一九三八年に同党が急速に弱体化し一九四六年に同党が解散するなかで、ロバートは、共和党候補として出馬することを目指したが、同党は、後に赤狩りで有名になったジョセフ・マッカーシーを指名し、彼が上院議員になった）

ウッドたちは、マッカーサーが米国参戦前、強硬ではないにせよ、穏健な介入論者であったことは気にしていなかった。③

ウッドも太平洋戦争中陸軍航空部隊の兵站関係のコンサルタントをつとめ、その仕事の関係で、マッカーサーを一九四三年五月、一九四四年夏、一九四五年五月に訪問した。もともとウッドは、マクニーダーと同様、戦闘参加を希望していた。彼は、一九四〇年一〇月、第一次大戦期の戦友であり、また、対英国支援論者でもあった、ニューヨーク市大手弁護士事務所共同経営責任者ウィリアム・ドノヴァンに、ローズヴェルトの三選目の可能性は高く、その場合、米国政府は、対英国支援を深め、その結果、翌年の半ばから九月ごろまでに、米国は欧州へ派兵をしているであろうと論じたのであった。ウッドは、米国参戦となった場合、米国政府と太いパイプを持つドノヴァンに実戦部隊に参加できるよう斡旋を依頼していたのであった。[④]（ドノヴァンは、一九二四年から五年間共和党政権の司法省検察次長をつとめた。一九四一年秋より、コロンビア法科大学院時代以来の友人であったローズヴェルト大統領の要請で、米国政府が始めた諜報機関情報調整委員会の委員長に就任し、同委員会が戦略情報局に発展すると同局のトップになった）

第二節　マッカーサー、アイゼンハワー、フェラーズ

マッカーサー大統領候補擁立運動で、前線にいたマッカーサーと米国内共和党右派との主要な連絡係を担当したのがボナー・フェラーズであった。フェラーズは、一八九六年二月七日、イリノイ州リッジファームのクェーカー教徒の家に生まれた。一九一四年五月、リッジファームの高校を卒業後、同年九月インディアナ州リッチモンドのアーラム大学に入学した。この大学は、クェーカー教徒の子弟が行く大学であった。二年後、フェラーズはリッジファームを選挙区とする米国有力下院議員ジョセフ・キャノンの推薦で陸軍士官学校に入学したのであった。同学校を一九一八年六月に卒業すると、陸軍中尉の任官となった。このあとフェラーズは一九二〇年にヴァージニア州ウェスト・モンローの陸軍砲術学校を卒業し、さらに一九二一年メリーランド州の化学戦術学校を卒業し、フィリッピンのコレヒドール勤務となった。同地勤務中の一九二二年、フェラーズはダグラス・マッカーサーとその新妻が主催するカクテル・パーティーに当時つかえていた上

官の副官として出席したのであった。マッカーサーはフェラーズを記憶する由もなかったが、フェラーズはこのハンサムな先輩が大変印象深かった。フェラーズは一九二三年、人事異動でコレヒドールからマサチューセッツ州へ赴任し、マーク・ハーン大将の副官をつとめた。この勤務が終わると一九二四年から一九二九年まで陸軍士官学校で数学と英文学を教えたのであった。一九二九年から一九三一年、フェラーズは再びコレヒドール勤務となった。帰国後、一九三一年から二年間ニューヨーク湾防衛の任官となった。フェラーズがマッカーサーと知り合えたのは一九三二年のことであった。フェラーズは、一九三三年から一九三四年までの二年間カンサス州フォート・レヴェンウォース陸軍指揮幕僚大学で過ごした。同校では、日米戦争前から対日占領期までマッカーサーのG2（諜報局）のトップをつとめたチャールズ・ウィロビーの授業の受講生であった。同校を卒業後一九三五年までの一年間エッジウッドの化学戦術大学で勉強し、同校を卒業したのであった。卒業後、フェラーズは、フィリッピン行きとなった。現地に赴任すると、フェラーズは、一九三五年に陸軍参謀総長を辞め、フィリッピン軍事顧問団の団長となっていたマッカーサーに重用されるようになった。[5] 一九三七年、マッカーサーは、フェラーズをフィリッピン国防軍創設計画の策定に深く関与させるようにした。しかし、この措置は、マッカーサーと当時彼の側近であったドワイト・アイゼンハワーとの関係悪化のなかで進められた。マッカーサーとフェラーズ対アイゼンハワーという、彼らの生涯にわたる対立の始まりであった。

アイゼンハワーはマッカーサーが自分の考えに完全に同調するイエスマンを好む傾向があると、自身の日記で激しく非難した。彼のこうした不満は、マッカーサーによりケソン大統領とマッカーサーの連絡係を一九三六年秋以来つとめていたフェラーズに向けられていった。アイゼンハワーは、フェラーズをマッカーサーの「ブーツなめの名人」と形容し、揶揄したのであった。彼は、マッカーサーのイエスマンの典型としてフェラーズを考えていた。[6]

一九三七年一〇月八日のアイゼンハワーの日記はいつものより比べて長く、その日の「事件」とそれに対する感想が赤裸々に記されている。その前日の晩、ケソンはマッカーサーを呼び出し、マッカーサーが軍事顧問団になった時点でケソ

ンに約束していたフィリッピン陸軍創設に関する国防計画予算案の規模について当初の想定金額をはるかに上回る額となった理由の説明を求めた。ケソンとしては、予告なしの国防予算増額であり、このような増額を議会にどう説明すべきか困惑していると述べたのであった。マッカーサーはこのような「変更」について何ら部下より知らされていないとケソンに告げたのであった。定期的なケソン・マッカーサー会談を希望していたアイゼンハワーと彼の同僚オードの懇請にもかかわらず、日頃国防計画予算案について両者へ丸投げしていたマッカーサーは、自分の了解なく国防予算案の「変更」を行ったとみなして、アイゼンハワー、オード、T・J・デービスを激しく叱責した。アイゼンハワーは、マッカーサーがケソンに二年前約束したフィリッピン陸軍創設には、当初予想していた金額を上回ることを、一九三六年六月以来覚書などで伝えていた事を、激しく叱責するマッカーサーに対して指摘したのであった。結局、マッカーサーはこのような予算案の増額は、部下に知らされていなかったとし、アイゼンハワーらが聞いたこともない国防予算案（詳細は不明）について話し出したのである。マッカーサーは、アイゼンハワーたちに、もしも彼の判断に不満であるならば辞任するようたたみかけたのであった。

アイゼンハワーはこの日の出来事により、マッカーサーにほぼ愛想をつかしたのであった。彼にすれば、マッカーサーは、自分の上司、部下とおそらく自分自身にも嘘をつき、高給・地位・マニラホテルのペントハウスの自宅の既得権益を守るために「正直、率直さ、責任感」を喪失した人物であったのである。世界は、マッカーサーを中心にまわり、その傲慢さは、ケソンと意見が対立して大統領と別れたさい、彼を「あの高慢な猿」と吐き捨てるように揶揄したり、米国陸軍関係者を誹謗中傷したりすることがよく物語っていた。また、アイゼンハワーは、フーヴァー大統領に呼ばれたマッカーサーが、副大統領候補に抜擢する相談に違いないと妄想していた頃のマッカーサーを思い出したのであった。彼は、マッカーサーほど、彼に関するちょっとした新聞・雑誌記事でいちいち一喜一憂する人物はいなく、これほどどうしようもない人物はいないと思った。アイゼンハワーは、自分自身怒りがおさまらない状況では冷静な判断ができないと思い、とり

あえずマッカーサーがここ数日のうちに決める—退役をするか否かの判断を見極めようと考えたのであった。アイゼンハワーはフィリッピンの陸軍創設に目処がつくまではマニラにとどまる所存ではあったが、マッカーサーがマニラにとどまり、また、その傍若無人な振舞いを続けるならば早目に帰国するように努力する意向でもあった。

この「事件」の一部始終を見ていたのが、ケソンへの連絡係としてマッカーサーに臨席を命じられていたフェラーズであり、アイゼンハワーはフェラーズが同席していることをうっとうしく思い、「イエスマン」フェラーズに対する嫌悪感を強めていったのであった。アイゼンハワー日記の原本では、一〇月八日の出来事を記述したさい、マッカーサーの政治的野心とエゴがその判断力を破壊し、その結果フェラーズのような無批判的に彼を崇拝する人物を周囲に固める結果をもたらしていると分析したのであった。⑦

フェラーズは、一九三八年フィリッピンを去り、陸軍大学に入学した。陸軍大学卒業後、フェラーズは一九四〇年夏の人事異動でカイロに赴任するまでの間母校ウェスト・ポイントで英語の講師（Assistant Professor）をつとめていたが、その副業は政治活動ともいえた。一九三八年から一九四〇年の時期、フェラーズは政治活動にも身を投じていった。彼は、一方においてマッカーサーとの連絡を保ちながら、旧知の間柄であったテネシー州選出のキャロル・リース下院議員（Carroll は男性）との交流を重視する一方、共和党右派の巨頭フーヴァー元大統領に接近したのであった。

第三節　共和党右派重鎮ハーバート・C・フーヴァー元大統領、共和党右派の連邦議員キャロル・リースとフェラーズ

フェラーズは、陸軍士官学校を卒業間もない時期から人脈開拓に力を入れた。その一人、連邦議会下院軍事委員会委員キャロル・リース下院議員との交友関係は、両者の生涯にわたるものとなった。一九二四年フェラーズはある法案についてロビー活動を行っており、そのさい、彼はテネシー州ジョンソンシティーを地盤とするリース下院議員に近づいたので

あった。同市は、フェラーズの祖先の出身地で、当時彼の親戚が市の有力者であった。リースとフェラーズの間には友情が芽生えた。ちなみにジョンソンシティーはフェラーズの親類の可能性があるグェン・寺崎（日本の敗戦後天皇の通訳をつとめた外交官寺崎英成の妻）の出身地でもある。[8]

第二次世界大戦勃発直後、フェラーズとリースは国際情勢について意見交換を行っていた。リースは、フェラーズの見方、すなわち、政権が欧州への輸出を行えるように中立法を修正したことは、米国を参戦の方向へ精神的に慣らせる過程のはじまりであるとする見解に全く同感であった。[9]

フェラーズがリースに披露したこの見解は、それより数日早くフーヴァー元大統領へ接近する話題としてフェラーズのフーヴァー宛の書簡でも披露されていた。フェラーズの政治活動で、その生涯にわたり重要な影響を与えたのがフーヴァー元大統領であった。フェラーズは、一九三九年九月、フーヴァー宛の書簡で、米国の欧州大戦への介入を避けるため、不介入運動のリーダーとしてマッカーサー将軍とチャールズ・A・リンドバーグ大佐（一九四〇年夏に結成されたアメリカ・ファースト委員会の有力メンバー）を担ぎだし、また、一九四〇年の共和党大統領候補としてマッカーサーを、同党副大統領候補としてリンドバーグを擁立すべきであると論じた。フーヴァーは、フェラーズに全く同感であると返信したのであった。

マッカーサーは、マッカーサー夫人（後妻）を通じてリンドバーグとの接点があった。彼女は、一九二八年から一九二九年父親とともに行った欧州旅行からの帰路、船内でチャールズ・リンドバーグとその母親と親しくなった。リンドバーグ親子は、チャールズの結婚前の最後の親子旅行を行っていた。

フェラーズは、フーヴァーにマッカーサーに最近書いた書簡を同封し、同書簡でローズヴェルト大統領はマッカーサーが有能であるが故彼を恐れていると強調したのであった。また、彼はフーヴァーに対して、不介入運動や共和党の政治活動に水面下で喜んで参加するとアピールしたのであった。[10]

一九四〇年、カイロへ出発前のフェラーズ少佐は、共和党の動向に多大な関心を持ち、リース下院議員に依頼して共和党の大統領候補者選定の大会に出席したのであった。出席するにあたり、フェラーズはリースに、大会で、また党綱領において共和党大統領候補者が政権はわが国を戦争に導いていると批判すると同時に、国防強化を唱えることを論じたのであった。フェラーズは、一一月までこうした政策推進を待つようでは選挙戦敗北と参戦となろうと予言したのであった。リースもフェラーズの見解に同感であった。[11]

第四節　戦時中のマッカーサー大統領候補擁立運動

一九四二年夏にカイロから帰国したフェラーズは、陸軍士官学校同期のなかで比較的早く准将に昇進した。そして約八ヶ月で一九四一年以来親密な関係にあったドノヴァン戦略情報局（Office of Strategic Services, OSS）長の下での勤務を終え、豪州ブリスベーンのマッカーサーのもとへ向かった。出発前にフェラーズは戦前のアメリカ・ファースト委員会の最有力者ウッドと同委員会の最大有力支援者の一人であったシカゴ・トリビューン社主のマコーミック大佐に会った。

ウッドは、米国陸軍航空部隊のコンサルタントの仕事で、豪州を五月に視察し、マッカーサーが大統領候補となることを口説いたのであった。ウッドは、マッカーサーの黙認のもと、帰国後マッカーサー大統領候補擁立運動をヴァンデンバーグとともに推進した。

一九四二年の中間選挙で、共和党は下院で四七議席、上院で一〇議席、議席を増やした。また、知事選の結果は、二六州が共和党の知事誕生となったのであった。そして、連邦議会では、一九三八年に結成された共和党と南部民主党の政治的協力関係はさらに強まり、このグループは大統領の軍事・外交政策を警戒しながらも支持する姿勢を示す一方、ニュー・ディール政策がもたらした国内政策を破壊していこうとしたのであった。

ウッドは、一九四二年年末に、マッカーサーの広報担当官に就任したラフォレットが、マッカーサーに有能な政治顧問

として働くことに期待するとラフォレットに伝えていたのであった。それというのも、ウッドは、マッカーサーを大統領候補に擁立することを考え始めており、そのことをラフォレットにも示唆していたのであった。この時期、水面下では、主にイリノイ州とウィスコンシン州で、マッカーサーを大統領候補に擁立する民間団体の結成が進められるようになった。ウッドとヴァンデンバーグは、こうした民間団体が派手にマッカーサー擁立運動を行うことを警戒する一方、この二人は一九四三年四月以前から密かに連絡を取り合いながら静かに政治運動を開始していたものと思われる。

こうした動きを察知してか、一九四三年四月上旬、スティムソン陸軍長官は、昔から存在していた軍人の選挙立候補禁止令を発表した。その直後、ヴァンデンバーグは、このことを公に批判した一方、マッカーサーは、一九四三年四月、ヴァンデンバーグ上院議員に書簡を送り、大統領候補になる関心を明示することなく今後の指導と鞭撻を仰いだが、この書簡がきっかけとなってヴァンデンバーグは、六月にマッカーサーのもとで諜報担当責任者であったウィロビーが訪米した際、彼にマッカーサーとの大統領選関係の連絡係になることを命じたのであった。[12]

一九四三年八月の段階で、マッカーサー大統領候補擁立運動の中核は、ヴァンデンバーグ上院議員、ウッド、新聞王マコーミック、新聞王ロイ・ハワード、新聞王フランク・ガーネット、元共和党全国委員長ジョン・ハミルトン、ロサンジェルズ・タイムズ新聞記者カイル・パーマー、ペンシルバニア州の共和党有力者で大富豪（石油王）のジョーセフ・N・ピューであった。このなかで特に重要なメンバーが、ヴァンデンバーグ、ウッド、マコーミックであった。ヴァンデンバーグ、パーマー、ガーネット、ハミルトンを除いて、フェラーズはその人生においてこの中核メンバーと深く関わるのであった。

このメンバーやほかの共和党右派は、ヴァンデンバーグの呼びかけで九月にミシガン州のマキナウで開催された共和党の会議に出席した。ヴァンデンバーグは、一九四四年の大統領選挙と戦後を見据えて、共和党内の右派と穏健派（ローズヴェルト外交に同調する国際派）との融和を図る狙いがあった。ヴァンデンバーグをはじめとする共和党指導者たちは、戦

時下の大統領に勝利するのは殆どあり得ないと考えていたが、ヴァンデンバーグは、外交政策について、ローズヴェルト政権が推進しようとしていた多国間の枠組みの下での戦後の国際社会における米国の指導力発揮にある程度同調することを示すことで、同党の孤立主義のイメージを払拭させ、政権担当能力を有権者にアピールしようとしていたのであった。

この会議には、ヴァンデンバーグが敵視していたウィルキーのほか、スタッセンのような党内で最もローズヴェルト政権寄りの政治家や、ジェラルド・ナイ、ウィリアム・ボーラ、ハミルトン・フィシュのような党内でもっとも反ローズヴェルト政権の政治家は欠席していた。会議には、タフト、ドゥイー、共和党州知事、共和党全国委員長ら四三名の有力な共和党政治家が会議の主要なメンバーであった。タフトはこの会議の共同議長をヴァンデンバーグとともにつとめた。ローズヴェルトと大変仲が悪かったフーヴァーは会議に出席しなかったものの、ヴァンデンバーグが会議前から策定していた国内と外交政策の綱領案のとりまとめに水面下で関与していた。

共和党右派は、会議に出席し、暫定綱領案を支持したものの、この会議で作成された党の暫定的綱領が、①大統領が推進する戦後国際秩序維持のため国際組織の立ち上げを推進することに同調したこと、それから、②この会議中共和党右派が敵視する同党国際派ウィルキーの国際派ライバルであったドゥイーが、会議の開会時に、恒久的な英国との同盟関係を成立させた後に中ソとの同盟関係も成立させる戦後構想を支持したことに反発していた。（②は暫定綱領に挿入されなかったが、シカゴ・トリビューン紙の社説でマコーミックは、ドゥイーを痛列に批判した。①は、一九四四年の共和党大会で党の政策綱領に挿入された）フーヴァー大統領は、こうした同盟関係を戦後推進することに否定的な見解を当時持っていた。

フェラーズは、この共和党右派の動向を踏まえて、九月七日付の覚書で、フーヴァー大統領とマッカーサーに、米国は戦後も英国との関係を友好に保つ必要性は説いたが、米英同盟関係は、むしろ平和の維持ではなく、次の戦争の要因となると論じたのであった。フェラーズは、ドゥイーのような米英同盟論者は米国の国益を損なうと批判し、米国は、戦後も軍事力を維持しながら、同盟関係にとらわれない自由行動を保てる状況を追求すべきであると説いたのであった。フェ

ラーズは、ドゥイーが共和党大統領候補となった場合、ローズヴェルトに負けるであろうと論じたが、戦時中の大統領選挙で野党の候補者が再選を目指す大統領に勝利するのは絶望的であるという空気が共和党内に充満していた。フェラーズは、現在の共和党にはともかく強い指導者が必要であると説いたのであった。これはマッカーサーの心をくすぐることを念頭に置いたフェラーズの持論であった。

マッカーサー擁立運動グループは、ヴァンデンバーグが八月にウィロビーに知らせていたように、この運動を静かに進めることで、マッカーサーが面目を失うリスクを回避し、一九四四年夏の共和党大会で勝負に出る戦略をとっていた。彼らは、共和党内の候補者選びがウィルキーとドゥイーの競争を中心に展開していることをよく知っており、マッカーサーが共和党大会で大統領候補に指名される唯一のチャンスは、この両者の勢力が大会で拮抗して紛糾した場合、マッカーサーを妥協の候補として担ぎ出す以外方法はないと考えたのであった。マッカーサーを支持するグループは、中西部、特に農村地帯に多かったものの、当時の世論調査では、国民全体としては、マッカーサーを大統領候補として関心を示す程度はそこそこしかなかった。一九四四年初頭の世論調査では、ローズヴェルト大統領がウィルキー、ドゥイー、マッカーサーいずれに対しても圧倒的に優勢であった。

一九四三年九月のギャラップ社の世論調査もローズヴェルト対マッカーサーの大統領選が現時点で行われた場合、前者が五六％、後者が四四％という結果であったが、ローズヴェルト政権側はマッカーサーの政治的野心とその国内政治・国内世論への影響力を警戒したのであった。九月のケベックの米英首脳会談で次の点が確認された。①対仏上陸作戦（Overlord）がイタリア上陸作戦より優先順位の高い作戦であると確認された、②アジア・太平洋方面では、太平洋艦隊の中央太平洋作戦を重視する、③英国のルイス・マウントバッテンを総司令官とする東南アジア方面軍を創設する、④新しく実戦で使用されるようになったB29長距離爆撃機をマリアナ諸島と中国で建設される飛行場へ配備して日本の本土を爆撃する。この会談結果を知ったマッカーサーは、九月下旬記者会見を行い、南西方面軍がないがしろにされていると非

難したのであった。この発言はそれ以前から根強く存在していた連邦議会内、マスコミ、世論でのマッカーサー支援論を再び勢いづかせ、ヴァンデンバーグ上院議員を喜ばせたのであった。こうしたマッカーサー支援論の盛り上がりは、英米間の対仏上陸作戦のタイミング、アジア・太平洋方面に関する英国や中国との調整、対欧州戦を巡る米ソの調整に微妙な影響を与えたことに加えて、ローズヴェルトが当初検討していたマーシャルを対仏上陸作戦の連合軍総司令官へ任命することをやめさせるひとつの背景となり、かわりに北アフリカとイタリア上陸作戦を推進してきたアイゼンハワーを任命するにいたったのであった。[13]

一九四四年一月にステイムソン陸軍長官は、陸軍の六四歳定年をマッカーサーに適用しないと発表し、その直後に二つ目の殊勲賞（Distinguished Service Medal）をマッカーサーに与えたのであった。二月には、大統領は、現役の軍人が、本人が求めない選挙の結果政治的役職に選ばれる場合その役職に就任できると発表したのであった。こうしたことは、マッカーサー支持者たちを喜ばせ、彼らが推進する運動が奏功していると考えたのであった。

ところが、マッカーサーを大統領にする会（中西部の一部の州、カリフォルニア、ミズーリ、ウェスト・バージニア、マサチューセッツ、ワイオミングの各州、一部の大都市に結成）が問題を起こした。ウィスコンシン州の有力なマッカーサー支持者で、ウッドとラフォレットが警戒していたランシング・ホイトは、独断で、四月四日のウィスコンシン州の共和党候補予備選にマッカーサーの氏名を候補者登録してしまったのである。結果は、ドゥイーの圧勝で、最下位となったウィルキーはこれを踏まえて選挙戦から脱落したため、ヴァンデンバーグやウッドが想定していた大前提が崩壊したのであった。ヴァンデンバーグはこの会の結成がかえって撹乱要因になると警戒していたが、その予想は的中したわけである。しかも、マッカーサーの氏名が予備選に候補者登録されていなかったとしてもドゥイーは圧勝していたであろう。ヴァンデンバーグが恐れていたマッカーサーの面目丸つぶれの事態であった。[14]

① Justus D. Doenecke, *Not to the Swift: The Old Isolationists in the Cold War Era* (Lewisburg, PA: Bucknell University Press, 1979),

9-14. 19-32, 45 ; Doenecke, *Stormm on the Horizon : The Challenge to American Intervention, 1939-1941* (Lanham, MD : Rowman and Littlefield, 2000) 127-130, 235-240 ; Wayne Cole, *America First : The Battle Against Intervention, 1940-1941* (Madison : University of Wisconsin Press, 1953), Chapters 1-2, *Roosevelt and the Isolationists,* 194-199 ; Arthur H. Vandenburg, Jr., ed., *The Private Papers of Senator Vandenburg* (Boston : Houghton, 1952), 76. 井口治夫「アメリカの極東政策――ハーバート・C・フーヴァーと日米関係」伊藤之雄・川田稔編著『環太平洋の国際秩序の模索と日本』（山川出版社、一九九九年）五～四三頁。

② Richard N. Smith, The Colonel : *The Life and Legend of Robert R. McCormick, Indomitable Editor of the Chicago Tribune* (Boston : Houghton Mifflin, 1997), 55-56, 60-61, 417-419.

③ Doenecke, *Not to the Swift,* 26. Cole, *America First,* 12-15. 25, 124, 170-171 ; D. Clayton James, *The Years of MacArthur : Vol. II,* 1941-1945 (Boston : Houghton Mifflin, 1975), 419（ラフォレットが戦後州知事となったという記述は誤り）, 241.

④ Wood to Donovan, October 3, 1940, "Donovan, William J., 1940-1947," Correspondance File, Robert E. Wood Papers, Herbert C. Hoover Presidential Library, West Branch, Iowa.

⑤ 笠井重治「天皇とボナー・フェラーズ准将の功績」（私家版パンフレット）政界往来社、一九八〇年 "Kasai, " Box 24, Bonner F. Fellers Papers, Hoover Institute Archives（以下HIAと略称する）, Stanford University, Palo Alto, California ; "Oral Reminiscences of Brigadier General Bonner Fellers," June 26, 1971, D. Clayton James, interviewer, 2, 14, MacArthur Memorial Library（以下MMLと略称する）, Norfolk, Virigina : Fellers to Val Washington, December 12, 1947, Folder 15, Box 1, Bonner F.Fellers Papers, MMLを参照）James T. Patterson, *Mr. Republican : A Biography of Robert A. Taft* (Boston : Houghton Mifflin, 1972), 227-228, 268-269, chapter 27 ; Richard N. Smith, *An Uncommon Man : The Triumph of Herbert Hoover* (Worland, Wyoming : High Plains Publishing, 1984), 281-291.

⑥ Daniel D. Holt, ed., *Eisenhower: Prewar Diaries and Selected Papers, 1905-1941* (Baltimore : The Johns Hopkins University Press, 1998), 304, 311, 335, 342-343, 351. カンザス州アビリーンのアイゼンハワー大統領資料館に所蔵しているアイゼンハワー日記の原本の一九三七年八月二五日の記述で、「アーシュなめの名人」はフェラーズのことであることが判る。

⑦ フェラーズがケンニにこの「事件」をどのように表したのかは不明である。なお、フェラーズがマッカーサー崇拝者として取り上げられている箇所は、前述アイゼンハワー大統領資料館にあるアイゼンハワー日記原本の一九三七年一〇月八日を参照。

⑧ Reece to Fellers, April 13, 1924, February 26, 1929, "Reece," Box 35, Fellers Papers, HIA.

⑨ Fellers to Reece, Sept. 22, 1939, Reece to Fellers, Sept. 26, 1939, "Reece," Box 35, Fellers Papers, HIA.

⑩ Fellers to Hoover, September 20, 1939, Hoover to Fellers, September 22, 1939, Folder 1, Box 3, Fellers Papers, MML : Jean MacArthur Oral History Transcripts : Tape1 : 1-1-15, Tape 2 : 2-9, 15-16, 18-29, 30-34, Tape : 14 : 33, MML.

⑪ Fellers to Reece, April 10, 1940, Reece to Fellers, April 11, 1940, Reece to Fellers, May 7, 1940, Fellers to Reece, June 1, 1940, Reece to Fellers, June 8, 1940, Reece to Fellers, June 12

and 22, 1940, "Reece,"Box 35, Fellers Papers, HIA.

⑫ Fellers to Dorothy Fellers, October 5, 1943, Folder 23, Box 1, Fellers Papers, MML ; James, *MacArthur Volume II*, chapter X. ウッド関係は、ウッドの文書を参照—— Philip F. LaFollette to Wood, November 26, 1942, Wood to LaFollette, December 10, 1942, Wood to LaFollette, March 9, 1943（ワシントンでラフォレットの連邦上院議員の兄と会談), LaFollette to Wood, March 21, 1943, Wood to LaFollette, June 25, 1943, Wood to LaFollette, July 6, 1943, Wood to LaFollette, July 23, 1943, Wood to LaFollette, January 19, 1944, "LaFollette, Philip F.," Correspondance File ; Wood to MacArthur, December 2, 1943, "MacArthur, Douglas, 1931-1945," Correspondance File ; Wood to Vandenburg, July 2, 1943, Joseph B. Savage to Vandenburg, July 1, 1943, "Vandenburg, Arthur, 1943-1944," Correspondance File ; Wood to MacArthur, December 30, 1943, "MacArthur, General Douglas, Presidential Candidacy, 1943-1944,"Subject File, Robet E. Wood Papers, Herbert C. Hoover Presidential Library, West Branch, Iowa

⑬ Forrest Pogue, *George C. Marshall : Organizer of Victory 1943-1945* (New York : Viking Press, 1963), 277-290 ; James, *MacArthur Volume II*, chapt. X ; Schaller, *MacArthur*, 76-88 ; Smith, Hoover, 324-335 ; Fellers, "Additional Notes on the Situation for My September 6 Report," September 7, 1943, Folder 22 and "Hoover," Box 3, Fellers Papers, MML. この報告書では、マーシャルが欧州の総軍司令官へ転出した場合参謀総長はアイゼンハワーになるであろうと分析していた。それから、ローズヴェルトはマッカーサーをまず参謀総長に抜擢することを検討したと書いている。マキナウ会議については、次を参照—— "Dewey at Mackinac," September 13, 1943, "Battle of Mackinac," September 20, 1943, *Time* ; Wayne Cole, *Roosevelt and the Isolationists*, 522-523, 540-544 ; Smith, *An Uncommon Man*, 325-326.

⑭ James, *MacArthur Volume* II, 410-412 ; Schaller, *MacArthur*, 83 ; Cole, *Roosevelt and the Isolationists*, 543. ホイートについては、註⑫の Wood to LaFollette, July 23, 1943 を参照。

第二章　終戦とマッカーサー擁立運動の復活

第一節　水面下で続いたマッカーサー大統領候補擁立運動

終戦時、マッカーサーを共和党大統領候補に擁立する運動は、一九四八年の大統領選に彼を候補として再び担ぎ出す可能性を残していたのであった。ドイツ降伏後にあたる一九四五年六月三〇日、リース下院議員はマッカーサーを共和党大統領候補として擁立する運動を一九四六年の中間選挙後に推進していくことに強い関心を示したのであった。①

そして、九月二〇日、リースは、降伏文書調印式におけるマッカーサーの演説は米国民の圧倒的多数が高く評価していると述べるとともに、次の四点を強調した。①マッカーサーの兵力削減に関する発言は事実を伝える意図であり、政治的発言でなく、米国民と議会はこの発言に好感を持っている、②マッカーサーの一時帰国のタイミングは　米国議会が開催中に行われるべきであり、そうすることで議会は彼が議会で演説を行えるよう準備ができる（一〇月一〇日に議会は両院合同の場でこの演説が行われることをマッカーサーに要望している）、③対日占領が始まった当初、米国内ではマッカーサーが日本に対して甘いのではないかという批判が存在していたが、占領軍が日本の非軍事化を効果的に進めるなかでこうした批判も下火になり、また、最近の戦犯容疑者の逮捕は、マッカーサーの迅速な対日占領政策のひとつとして米国内で好印象を与えている、④マッカーサーは、反ニュー・ディールと国益重視の米国外交を推進できるホープであり、米国民の間に根強い人気があることから、水面下で一九四八年の大統領候補擁立運動を準備すべきである。

このリースの書簡は、トルーマン大統領が九月一七日にマッカーサーの戦時中の功績をたたえるため一時帰国を要請した直後に送られたものであり、マッカーサーは、この要請と一〇月一九日の大統領の同様の要請について、日本における任務に忙殺されているために一時帰国ができない旨を伝えていたのであった。また、対日占領用の米軍兵力削減について、マッカーサーは九月一七日に、現在の非軍事化などの対日占領政策が間接統治を通じて円滑に進めば二〇万人まで削減できると公言したのであった。この発言は、ドイツの降伏以降米国内で急速に強まっていた米兵の帰還を要望する社会的圧力に拍車をかけ、国務次官アチソンなどからマッカーサーが政治問題に口出ししたという批判を招いたのであった。

この発言を行うにあたり、マッカーサーとフェラーズは、ロバート・ウッドがフェラーズに託したマッカーサー宛の九月四日付の書簡を読んでいた。ウッドは、国内における平時体制へただちに移行する社会的・政治的圧力に注意すべきであるという忠告をしていた。それというのも、もしもマッカーサーが対日占領に兵力増強を要望した場合、それは彼の失脚につながりかねない状況となり、むしろ日本の非軍事化後の対日占領政策用の兵力の規模は二〇万人から三〇万人です

むのではないかと助言していたのであった。ウッドは、アイゼンハワーが指揮しているドイツ占領地域の兵力は二〇万人未満で十分ではないのかとマッカーサーに述べ、フェラーズに対しては対日占領は、比較的小規模な陸軍、機動的で効率的な海軍と空軍の投入で済むのではないかという助言を行ったのであった。[2] 八月下旬の時点でフェラーズは近い将来帰国したい意向をリースに述べていた。フェラーズはマッカーサーの政治的野心を満たすための画策を米国内で行う仕事を探しはじめた。[3]

フェラーズはリースに、マッカーサーは、占領当初連合国軍の捕虜や抑留民の解放を混乱なく行う必要があり、米軍が日本軍を圧倒できるだけの兵力を日本に上陸させるまではデリケートな対応をせざるをえなかったと元帥を弁護した。また、米国のマスコミが早く東京に乗り込めなかったのは、東京内外の治安の確保にやや時間がかかったためであったと指摘したのであった。そして、こうした事態が、米国のマスコミの一部に元帥が日本に甘い対応をしていると批判するに至ったことは的外れであると批判したのであった。また、間接統治による占領がうまくいった場合六ヶ月以内に二〇万人まで削減できるという元帥の公言は、間接統治を選択した米国政府の見解を肯定する内容に過ぎないと指摘したのであった。

そして、フェラーズは個人的見解として、マッカーサーは、決して自ら共和党大統領候補を欲するような姿勢を示さないが、共和党がマッカーサーの大統領候補就任を決めた場合、本人は公僕になることを要請する米国民に応じるであろうと考察したのであった。フェラーズは、マッカーサーが共和党大統領候補に選ばれた場合、大統領選に勝利することは可能であり、その場合は、ニュー・ディール路線の終焉とより国内改革重視の政策志向になろうと考察したのであった。[4]

日本降伏後もフェラーズは引き続きマッカーサーの軍事秘書をつとめた。フェラーズは、一九四五年一一月から一九四六年年初まで一時帰国をしたが、ハワイから東京までの旅程は、マッカーサーのバターン号に搭乗できる好待遇であった。[5]

その背景には、フェラーズの米国内政治動向の情報収集が関係していた。東京に到着後、フェラーズは報告書を作成した。この報告書を作成するにあたり会談した相手は、マッカーサーを政治的に支持する人たちが中心であった。――フー

ヴァー大統領、フーヴァーの側近で共和党全国委員会補佐官・元外交官ヒュー・ウィルソン、共和党有力者キャロル・リース下院議員、共和党有力者ケネス・ウェーリー上院議員、共和党の有力者ジョセフ・マーティン下院議員、共和党の下院議員ジェシー・サムナー、共和党の下院議員ブラウン（オハイオ州）、シアーズ社会長ロバート・ウッド、シカゴ・トリビューン紙社主ロバート・マコーミック、終戦時までマッカーサーの広報担当官であったフィリップ・ラフォレット大佐（元ウィスコンシン州知事）、マッカーサーを信奉するジャーナリスト（フレージャー・ハント、コンスタンティーン・ブラウン、など）、労働組合の有力指導者ジョン・L・ルイス。このほか、フェラーズは、トルーマンの首席補佐官リーヒー提督、ベントン国務次官補と会談していた。フェラーズは、ニューヨークでウォルドルフ・アストリアに滞在中のフーヴァー元大統領に会い、フーヴァーが米国はローズヴェルトにより第二次世界大戦参戦に導かれたとする開戦前のローズヴェルト外交を批判する書物を執筆中であることを報告書で紹介していた。

フェラーズは共和党も民主党もマッカーサーが一九四八年の大統領選に出馬するかどうかについて注目していると報告書で考察したのであった。共和党の候補者は、マッカーサーを除くと、タフト、ヴァンデンバーグ、スタッセン、ドゥイー、ブリッカーであることを紹介した。民主党の政権内の勢力は、ローズヴェルト死去後その権力基盤を維持している人たちはトルーマンが続投することを望んでいるものの、トルーマンは二期目を望まないであろうと指摘したのであった。ジェームズ・バーンズ国務長官が民主党の大統領候補になれるかは国際情勢の展開（米ソ友好ムードの維持の可能性）次第であろうと考察したのであった。ヘンリー・ウォーレス商務長官は、南部民主党が彼を支持していないため民主党候補になることは不可能であると論じたのであった。[6]

職探しの最中、フェラーズはリース下院議員が共和党全国委員会委員長に就任したことを知り、四月四日に早速祝辞と政策提言を兼ねて書簡を送った。フェラーズは、現在の共和党にとって引き続き危険な勢力は、米国北東部を中心とする共和党穏健派であり、暗にアメリカ・ファースト委員会の勢力基盤を肯定するかごとく、党の精神はリンカーンの出身地

である中西部から派生しなければいけないと説いたのであった。軍事政策については、軍事教練（Universal Military Training　一年間の軍事教練を一定の年齢の男性を対象に義務化する）は、コストパフォーマンスの点で無駄であり、むしろ米国が推進すべき政策は、①収入が比較的よい比較的小規模なプロの軍人による軍事組織の形成であり、②米国の軍事力は、科学と産業と軍部を融合させたシステム（のちにアイゼンハワーが大統領の任期終了時に警鐘を鳴らす軍産複合体）を構築すべきであり、③近い将来音速をこえるであろう空軍力の増強が有用である、と指摘したのであった。

リースはフェラーズが対外戦争退役軍人協会（Veterans of Foreign Wars, VFW）の広報担当部長に就任すべく七月に帰国する可能性が高いことを歓迎し、帰国後ただちに共和党全国委員会の仕事を手伝うことを依頼したのであった。リースはVFWにおけるフェラーズの身分は安定しており、この仕事とリースの仕事はさまざまな接点がでてくるであろうと予想していたのであった。リースは、また、彼の周辺にはマッカーサーを一九四八年共和党大統領候補として有望視している人々が多いことを指摘したのであった。五月上旬、マッカーサーは、フェラーズが見せたリースからの過去二通の書簡を興味深く読んだのであった。フェラーズによると、①マッカーサーは、解任されない限り対日占領政策を完成させる意向であり、それまでは帰国するつもりはない、②対日占領が成功するには占領期間が短くすむことが肝要であり、占領期間は三年から五年であろう、③彼は大統領候補になる関心はないとフェラーズに語った。③についてフェラーズは、もしも共和党が大統領候補に就任することを求めた場合、公僕となる要請を元帥は断り切れないのではないかと質問したところ、マッカーサーは肯定したのであったと、指摘した。この最後の点と①について、フェラーズは全米最大の労働組合アメリカ労働総同盟傘下の有力な組合全米鉱山組合（United Mine Workers）委員長ジョン・L・ルイス宛の書簡でも同趣旨のことを伝えていたのであった。アメリカ労働総同盟の実権を掌握していたルイスは、マッカーサーの熱狂的支持者であった。リース共和党全国委員長は、有力労働組合CIO（Congress of Industrial Organizations 産業別労働組合会議）がPAC（Political Action Committee 政治活動委員会）を通じて政治的影響力を拡大している以上、共和党自身従来の経済界重視か

ら労働組合の票を取得することにも目配りをする必要があると論じていた。フェラーズはこうしたことをよく承知していたのであった。マッカーサーもルイスと政治的に連携することに関心を示していた。[7] 帰国後のフェラーズはマッカーサーの政治的野心にこたえるべく動きだすのであった。

第二節　マッカーサー大統領運動の組織化

マッカーサーが、一九四七年三月に早期講和を唱えた直後、イリノイ州とウィスコンシン州の有力者――ロバート・ウッド、シカゴ・トリビューン社主マコーミック大佐、ウィスコンシン州ミルウォーキー市のランシング・ホイト――は、マッカーサーを一九四八年共和党大統領候補に擁立することを検討しはじめたのであった。ウッドは、ホイト宛の書簡で、マッカーサーは、候補者名簿に自身の氏名が載せられることは反対しないであろうが、かといって自ら手を上げることはないであろうと指摘したのであった。[8] 六月一六日、ウッドは、現在の共和党内の動向は、ニューヨークを中心とする共和党穏健派に支持されているトーマス・ドゥイー対タフト上院議員とブリッカーオハイオ州知事、そして西部共和党員という対立構図となっていると指摘したのであった。ウッドは、一九四三年五月に米国航空隊のコンサルタントとしてブリスベーン入りしてマッカーサーと会談して帰国してから一九四四年の時期マッカーサーを大統領候補に擁立することに熱心であったことを回想した上で、マッカーサーは戦時中の前線の司令官としてこの擁立運動に乗らなかったことは正しい判断であったと指摘したのであった。ウッドは、一九四八年はマッカーサーは年を取りすぎていると考えていたが、現在の共和党の対立構図、そしてウッドが複数の有力上院議員と話したところ、そろそろ妥協の候補者を考えておく必要があり、その人物こそマッカーサーであると断言したのであった。ウッドは、タフトとブリッカーは大衆へのアピールという点では問題があると判断していたのであった。[9] このあと、マッカーサーからの音信が途絶えた。

一方、米国大統領ハリー・S・トルーマンは、この動きを察知していたようである。トルーマンが書いていた七月二五

日付の日記（二〇〇三年に該当部分が公開）で、トルーマンは、マッカーサーの共和党大統領候補として出馬する可能性について、アイゼンハワー参謀総長と話していたのであった。トルーマンはアイゼンハワーに対して、マッカーサーが翌年夏の共和党全国大会直前に凱旋帰国して、そこで共和党大統領候補の指名を受ける可能性を示唆して、その場合、同大会の後に開催される民主党全国大会の前に民主党大統領候補として名乗り出るべきであると奨励したのであった。その場合、自分は喜んで副大統領候補として共に出馬しようとも述べている。アイゼンハワーはこの誘いに乗らなかったが、当時のトルーマン政権の支持率の低迷とマッカーサー大統領候補の可能性は、トルーマンに動揺を与えていたと言えよう。

一〇月中旬、マッカーサーはウッドに対して、マッカーサーが前年五月上旬フェラーズに語ったことと同趣旨のこと、つまり、前述のウッドが三月にホイトに指摘したことと同趣旨のことを述べたのであった。[10]

ウッドは、六月一六日付と一〇月一七日付のマッカーサー宛の書簡で、できれば一九四八年四月のウィスコンシン州予備選挙前に米国市民の前に姿を現すため一時帰国する必要があることを指摘したが、マッカーサーは拒んだ。[11] それでもウッドは、一一月六日のマッカーサー宛の書簡で、できれば三月、あるいはウィスコンシン州予備選挙の前後にあたる四月あるいは五月に一時帰国を望んでいることを再び伝えたのであった。その一方で、ウッドは、一九四三年から一九四四年のときと同様、擁立運動の全国的組織化には慎重で、共和党大会よりどんなに早くても三ヶ月前まで全国的な組織運動を始めることを待つべきであると論じたのであった。ウッドは、前回と同様、早すぎる全国的運動はマッカーサー攻撃に火をつけるだけであり、現在はウィスコンシン州に限定した展開で十分であると判断していたのであった。さらに、そもそも、マッカーサーは妥協の候補者なので、全国運動を早く行った場合、妥協を行う事態になったさい、タフト支持者の支持を集めづらくすると指摘したのであった。マッカーサーは擁立運動についてはウッドたちにまかせると返信したものの、三月か四月に帰国することは自分が政治的機会主義者であるという批判を招き、また、自分の良心にも反すると拒否したのであった。しかし、こうしたマッカーサーの見解に対して、ウッドが一一月二五日シカゴで開催した会議で、ウッド、

フェラーズ、ラフォレット、ランシング・ホイト、ハンフォード・マクニーダーをはじめとする参加者たちは、ラフォレットを除いてマッカーサーの一時帰国を望んだのであった。また、マッカーサーは共和党大会で候補者選定が難航した場合の政治的妥協候補者であるという点では、一名を除き、ウッド、フェラーズ、ラフォレット、ホイト、マクニーダーたちは賛成であった。ウッドは一二月上旬こうしたことをマッカーサーに伝えたのであった。当面の課題は四月上旬のウィスコンシン州予備選でどの程度の結果となるかであった。[12]

ウッドがシカゴで会議を行った同時期、マッカーサー擁立運動のもう一人の要人が極東へ向かった。一九四七年一一月、全米最大級の新聞王ロバート・マコーミック大佐は、その本拠地シカゴから数週間のアジア視察旅行へ向かった。この旅行におけるマコーミックの最大の狙いは、マッカーサーと東京で会談し、きたる一九四八年秋の大統領選挙に共和党大統領候補として出馬する準備に協力を要請することにあった。前述のごとく、マッカーサーは共和党大統領候補になるよう積極的な姿勢を示すことはなかった。マコーミックの第一候補はタフトであったが、タフトのカリスマ性の欠如を危惧したマコーミックは、リスクヘッジとしてマッカーサーに一九四三年～一九四四年の時と同様注目したのであった。マコーミックは、マッカーサーに日本にいながら一九四八年四月六日ウィスコンシン州で行われる共和党大統領候補選出予備選挙を念頭に、同州の有権者に共和党大会での大統領候補指名の打診に応ずるシグナルを送るよう助言したのであった。[13]

第三節　マッカーサーの静観姿勢

マッカーサーは、このようなシグナルは、前述のごとくフェラーズやウッドのような有力者には示していた。そして、ウッドに以前語った内容を一九四八年三月上旬公表したのであった。こうすることで、ウッドやウッドにそのような公表を求めていた支持者を満足させたのであった。

マッカーサーは、ウッド、そして前述のごとく一九四六年五月上旬にフェラーズに語っていたように、選挙には自ら名

乗りでることはないが、自分の氏名が予備選挙に候補者として登録されることについては黙認し、もしも共和党大会で指名を受けた場合は大統領候補になるという姿勢を三月九日公表したのであった。[14] 三月九日のワシントン・ポスト紙では、そのようなことを間接的に示唆するマッカーサーの発言が報道された。[15]

四月六日マッカーサーの出身地で行われた共和党ウィスコンシン州予備選で、マッカーサーは惨敗した。フェラーズが四月下旬マッカーサー夫人に書簡で伝えていたように、マッカーサーが共和党全国大会開催時あるいはそれ以前に一時帰国して一般有権者に姿を見せない限り、マッカーサー元帥が共和党大統領候補の指名を受けるのは無理であろうと論じたのであった。ただし、もしもタフトが共和党大会で指名を受けなかった場合、リース共和党全国委員長、そして場合によってはタフトは、マッカーサーの指名に動くのではなかろうかと推察したのであった。フェラーズは、水面下でマッカーサーを大統領候補に擁立しようとしている有力者たちに披露できる私信を送ってもらえないかという強い要望が、マッカーサー擁立運動グループ内にあることを述べたのであった。そのような私信には、もしも大会で大統領候補となる指名を受けた場合それを断らないということを明確に示すことが望まれていたのであった。[16] マッカーサー元帥はそのような私信は送らなかった。

ウッドは、ウィスコンシン予備選の惨敗の一因は組織化が不十分であったと指摘した上で、こうなったにもかかわらず、マッカーサーが仮に圧勝していたとしても共和党大会で、タフト、ドゥイー、スタッセンが主導権を握れない状況下ではじめて妥協の候補者マッカーサーの可能性が台頭するのであると論じた。ウッドは、マッカーサーの一時帰国は不要で事態を静観していればよいと助言した。しかし、翌週ウッドは周囲の圧力により、五月に一時帰国する催促をしたのであった。ウッドは、その場合、他州にはマッカーサーを候補者として登録していないので大統領候補になる野心があるという批判を受ける心配はないと論じたのであった。マッカーサーは再び一時帰国の要請を拒んだ。[17]

一九四八年五月に入ると、マッカーサー擁立運動は、元帥が帰国しない状況下ですっかり下火となった。擁立運動の中

心メンバーの一人であったジェームズ・ヴァン・ザント下院議員は、ペンシルバニア州の共和党代表団（Pennsylvania Republican Delegation）たちが推薦するマサチューセッツ州の連邦下院議員ジョセフ・マーテインを後押しする流れに完全に乗っかっていった。[18] 六月下旬にフィラデルフィアで開催された共和党全国大会で、党はドゥイーを共和党大統領候補に選出した。タフトは、一九四〇年の共和党大会と同様、二位であった。[19] マッカーサー夫人はフェラーズにこの一件が終了したこと自体夫婦そろってほっとしていると心境を綴った。[20]

マッカーサーが、ウィスコンシン州予備選で、同州共和党主流派が支持したハロルド・スタッセン元ミネソタ州知事に大差をつけられて二位となってしまったのは、彼が一時帰国を果たせなかったという要因以上に次の問題点があった。まず、ウィスコンシン州の共和党主流派が、ホイトやラフォレットと反目関係にあった。それから、フィリップの兄を一九四六年の同州共和党連邦上院議員候補者予備選挙で破って上院議員になったばかりのジョセフ・マッカーシーは、同州予備選でマッカーサー不支持を表明していた。また、彼は他の同州共和党主流派と同様スタッセンを支持したのであった。こうしたことがウィスコンシン州内におけるマッカーサー擁立運動の弱さを物語っていた。最後に、ションバーガーが指摘しているように、世論は、戦時中も戦後もマッカーサーに強い敬意を抱いていたものの、大統領候補としては彼を有力視していなかったのであった。[21]

第四節　革新主義とマッカーサー

マッカーサーを頂点とする総司令部（GHQ）が、日本の民主化と軍国主義の除去を目指すべく広範囲の社会、経済、政治、法制に関する改革を推進できたのは、彼と彼のスタッフが革新主義とニュー・ディール時代の影響を受けていたことと無縁ではなかろう。元帥の世代と米国内政治の支持者たちは、一九世紀末から第一次世界大戦まで展開された革新主義の時代の洗礼を受けていた。この国内の社会改革運動は、政治（例えば腐敗の摘発と民主主義の促進と強化）・社会（例え

ば貧富の差の是正、女性や子供の権利向上）・経済（例えば大企業の市場経済への影響力拡大を消費者社会に合致した状況にする、労働組合を容認していく）の改革を、都市部の新興の中流階層の男女が中心になって富裕層や労働者とも連携しながら推進していったのであった。元帥の有力な支持者であったフィリップ・ラフォレットは、元帥の祖父が州知事を非常に短期間であるがつとめた出身地ウィスコンシン州の元知事であった。フィリップの父親ロバートは、革新主義時代の代表的存在で、州の独占企業的存在であった鉄道会社を規制していった連邦議会上院議員であった。フィリップは、父親の政治思想的継承者でもあった。また、全米最大級の発行部数を誇るシカゴ・トリビューン紙の社主で超保守主者ロバート・マコーミックも革新主義運動の支持者であった。この運動は一枚岩でなく、連邦政府の社会や経済問題への介入の度合いについて、また、問題解決の優先順位については多種多様であった。ただし、全体としては中央政府の機能拡大と問題介入には抑制的であり、むしろ地方自治体と民間の役割を重視し、また、労働組合運動については、社会主義・共産主義の台頭を封じ込めるという点では、フランクリン・ローズヴェルトが推進したニュー・ディール政策とは対照的であった。ニュー・ディール政策は、大恐慌という国家非常事態に対処すべく中央政府の機能拡大と社会と経済問題への積極的介入を推進し、米国の元来保守的な政治風土であるが故拡大しにくい社会主義・共産主義を容認する姿勢を示していったのであった。大企業の適正規模については、この二つの時代、特に革新主義の時代は大企業容認論と大企業解体論が激しくぶつかり合ったが、フーヴァー元大統領のような革新主義者やニュー・ディールの独占禁止政策の終着点は、ルイス・ブランダイス最高裁判事が主張したような、大企業の中小企業への解体ではなく、独占禁止法を適宜適用したり企業活動を監視することで、経済における競争原理が作用することが維持できるのであれば、大企業の存在を容認する考えであった。元帥の総司令部の将校には革新主義の時代とニュー・ディールの時代の影響を受けた人たちが並存していたのであり、同じ人物のなかにこの二つの時代の影響が並存していた場合も多かったであろう。[22]

革新主義の考えを体現していたフーヴァー元大統領は、一九四五年一〇月にフェラーズを介して、占領軍の総司令官の

退任のタイミングを見計らって行うことを勧めていた。[23] 一九四六年五月、トルーマン大統領の要請で世界食糧調査団の団長をつとめていたフーヴァーは、東京でマッカーサーと会談を重ねた。そのさい、フーヴァーは、元帥を大統領候補に擁立する動きが国内に存在し、自分は元帥が一九四八年の大統領選で勝利できると語ったところ、マッカーサーは、そのような動きには関心がないと答え、フーヴァーはそれ以上このことについて話さなかった。しかしながら、フーヴァーは、マッカーサーが一時帰国をした上で、聖書に登場するバプチストのジョンのような、堕落した米国内政治の改革を呼び掛ける役割を務めることを働きかけ、米国で米国政府や外交問題などについて三回ほど講演することを要請した。マッカーサーは、そのようなことを行うタイミングを教えてくれるよう依頼したのであった。同年一〇月、フーヴァーは、米国中間選挙後に、マッカーサーの一時帰国を依頼し、そのさい、五月の東京会談で取り上げたようなテーマに基づく講演を、米国内三ヶ所で行うことを要望したのであった。しかし、元帥は、対日占領政策の公務に忙殺されており、対日講和の実現までは一時帰国は無理であると返答したのであった。[24] フーヴァーは、タフトを大統領候補者に擁立する支持者であったが、マッカーサーを共和党の立て直しに利用することについては積極的であった。一九四七年から一九四八年にかけてマッカーサーが財閥解体にこだわったことについて、フーヴァーは、米国政府の関係者と同様、これ以上の解体は不必要であり、むしろ日本経済の回復を最優先すべきであるという見解を米国政府内で推進していったのであった。

マッカーサーは、一九四六年の初頭、戦略爆撃調査団に随員して来日した、元アメリカ・ファースト委員会支持者ポール・ニッツェをクレーマー初代経済科学局長の後任に抜擢しようと試みたことがあった。ニッツェは、ウィリアム・ドレーパー陸軍次官やジェームズ・フォレスタル海軍長官・国防長官と同様ディロン・リード証券会社の幹部出身であった。フォレスタルが日米開戦前に、ローズヴェルト大統領の要請で政権入りをはたしたさい、ニッツェは、フォレスタルの依頼で、ディロン社時代と同様に、フォレスタルの側近を務めていた。このことや、占領がはじまった当初財閥解体にマッカーサーが熱心でなかったことを考えると、一九四七年から一九四八年にかけてマッカーサーが財閥解体にこだわった理

由は、ションバーガーが指摘する、占領政策を巡る米国政府とマッカーサーの主導権争いのほか、独占資本と戦う改革者のイメージを米国内政治に訴えたかったのではなかろうか。[25] マッカーサーは、ニュー・ディールに敵対的なものの、革新主義時代の社会や経済の改革については支持する傾向にあった彼の米国内の支持者たちを、米国政府に対する盾として利用しながら、占領政策の主導権を維持しようとしたのであった。しかしながら、米ソ関係の悪化に伴い、米国政府は、日本の経済的立ち直りを最優先すべく、マッカーサーの占領政策における裁量権を大幅に縮めていったのである。また、マッカーサー擁立運動の中心人物であったウッドですら、マッカーサーの財閥解体政策は行き過ぎていると、批判的であり、マッカーサーに有能な経済顧問が必要であると懸念していた。しかし、マッカーサーの考えは、過度な資本と富の集中を排除していくことは、日本の経済社会の安定と民主化、そして、日本の経済発展に必要であるとウッドに反論したのであった。こうした措置こそ、日本国内の共産主義と社会主義の封じ込めに一番貢献すると主張したのであった。[26]

① Reece to Fellers, June 30, 1945, Folder 4, Box 4, Fellers Papers, MML.

② Wood to Fellers, Sept. 4, 1945, Wood to Macarthur, Sept. 4, 1945, Wood to Fellers, Sept. 17, 1945, "Wood," Box 18, Fellers Papers, HIA.

③ James, *MacArthur : Volume III*, 17-18, 22 ; Fellers to Reece, Aug. 22, 1945, Reece to Fellers, Sept. 20, 1945, "Reece, " Box 35, Fellers Papers, HIA.

④ Fellers to Reece, Oct. 10, 1945, "Reece, " Box 35, Fellers Papers, HIA.

⑤ Fellers to Hunt, January 26, 1946, Folder 9, Box 21, Fellers Papers, HIA.

⑥ Fellers, "Memorandum to General MacArthur," Jan. 19, 1946 Folder 26, Box 5, Fellers Papers, MML. See Fellers to Dorothy Fellers, January 20, 1946, Fellers Papers, Folder 26, Box 5, MML.

⑦ Reece to Fellers, April 30, Fellers to Reece, May 8, "Reece," Box 35, Fellers Papers, HIA ; Fellers to MacArthur, May 24, 1946, Folder 19, Box 3, Fellers Papers, MML ; Fellers to Constantine Brown, March 7, 1946, Constantine Brown to Fellers, May 12, 1946, Folder 11, Box 19, Fellers Papers, HIA.

⑧ Wood to Lansing Hoyt, March 27, 1947, "MacArthur, General Douglas, Presidential Candidacy, 1945-1948,"Subject File, Robert E. Wood Papers, Herbert C. Hoover Presidential Library, West Branch, Iowa（以下、"MacArthur 1945-1948 Subject File, Wood Papers"と略称する）

⑨ Wood to MacArthur, June 16, 1947, MacArthur 1945-1948 Subject File, Wood Papers. トルーマン日記については、平成一五年七月一二日の朝日新聞記事「マッカーサー立候補を懸念 アイゼンハ

ワーに出馬促す」を参照。

⑩ MacArthur to Wood, October 15, 1947, MacArthur 1945-1948 Subject File, Wood Papers.

⑪ Wood to MacArthur, June 16, October 17, 1947, MacArthur 1945-1948 Subject File, Wood Papers.

⑫ Wood to MacArthur,November 6, December 4, 1947, MacArthur to Wood, November 16, 1947, MacArthur 1945-1948 Subject File, Wood Papers.

⑬ Smith, *The Colonel*, 470, 472.

⑭ Wood to MacArthur, February 28, March 8, Mach 8 cable, March 13, 1948, MacArthur to Wood, April 29, 1948, MacArthur 1945-1948 Subject File, Wood Papers.

⑮ James, *The Years of MacArthur: Vol. III*, 208.

⑯ Fellers to Jean MacArthur, March 22, 1948, Fellers to Jean MacArthur（氏名の部分は空白となっている）, April 29, 1948, "Jean MacArthur," Box 3° Fellers Papers, MML. フェラーズはりの四月の書簡について、友人であったイリノイ州選出下院議員エドワード・ジェニソンに伝えている。Fellers to Edward H. Jenison, May 21, 1945, "Jenison, Ed.",Box 3, Fellers Papers, MML.

⑰ Wood to MacArthur, April 9, 1948 (two letters), MacArthur to Wood, April 29, 1948, MacArthur to Wood, may 3, 1948, MacArthur to O'Gare, May 1, 1948, Wood to MacArthur, May 6, 1948, MacArthur 1945-1948 Subject File, Wood Papers.

⑱ James E. Van Zandt to Fellers, May 26, 1948, Van Zandto to William Robert Fuss, May 19, 1948, Folder 15, Box 1, Fellers Papers, MML.

⑲ Patterson, 226-228, 414-415.

⑳ Jean MacArthur to Fellers, July 24, 1948, "Jean MacArthur," Box 3, Fellers Papers, MML.

㉑ Schonberg, 51, 78-80.

㉒ 井口治夫「アメリカの極東政策」、三三頁。

㉓ Herbert Hoover to Bonner Fellers, October 15, 1945, Folder 1, Box 3, Fellers Papers, MML.

㉔ May 4, 5, 6, 1946, Tokyo, "Famine Emergency Committee, General-Herbert Hoover Diaries: Round World Trip"; Hoover to Fellers, October 17, 1946, Hoover to MacArthur, October 17, 1946, MacArthur to Hoover, October 31, 1946; "MacArthur," Herbert C. Hoover Postpresidential Papers, Hoover Library, West Branch, Iowa.

㉕ 対日占領経済際策と財閥解体に深く関わったESS局長は、初代のクレーマーが一九四五年年末に帰国すると、その後任人事でウィリアム・マーカット少将が抜擢されたが、彼は、一九四六年春にかけて、戦略爆撃調査団の中心メンバーであったポール・ニッツェに経済科学（ESS）局長就任の要請を熱心に行い、ニッツェも彼自身が提示す権限に関する条件がGHQと米国政府に受け入られれば就任する考えであったが、結局陸軍省がこの人事に消極的であったことから、経済問題にうということを自覚しているマーカットが局長に就任したのであった。米国ワシントンDC連邦議会図書館所蔵ポール・ニッツェ文書の戦略爆撃調査団日本関係文書（第一六五箱フォルダー六番）を参照。ニッツェの回想録では、彼は滞日中マッカーサーとの親交を深め、マッカーサーはニッツェを経済科学局長に就任することを要請したが、ニッツェが米国政府との連携を重視したため、要請を撤回したと述べているが、ニッツェ文書はこの記述に疑問を投げかけている。Paul H. Nitze, *From Hiroshima to Glasnost: At the Center of Decision, A*

Memoir (New York: Grove Weidenfeld, 1989), 3-4, 38-39; Schaller, *MacArthur*, 137-138, 144; Schonberter, 75-79.

㉖ February 20, 1947, RG10, VIP File "Robert Wood," MacArthur Papers, MacArthur Memorial Library, Norfolk, Virginia; Wood to MacArthur, December 31, 1947, MacArthur to Wood, January 12, 1948, MacArthur 1947-1948 Correspondence File, Wood Papers.

結　論

以上考察してきたように、共和党右派は、そのシンボルとしてマッカーサーを、戦時中と終戦後、タフト上院議員を有力視しながら、共和党大統領候補の妥協候補として後押ししたのであった。戦時中の場合、タフトが上院議員再選を選択したため、共和党右派はあえて遠い太平洋の戦地にいたマッカーサーを、共和党内の大統領候補者選びが紛糾した場合の妥協の候補者として、水面下で擁立する動きを展開したのであった。共和党右派は、一般有権者に広く存在していたマッカーサーのカリスマ的イメージを利用しながら、共和党内少数派となってしまった共和党右派の影響力を確保しようとしたのであった。この政治運動は、マッカーサーの太平洋戦争作戦推進に利用された。マッカーサーにとってこの運動は、米国内政治への影響力の確保と、米国内政治情勢の情報確保というメリットがあった。むしろ、戦時中の場合、こうしたことにこの運動の意義があった。戦後の場合、この政治運動はマッカーサーの占領政策に利用される側面が重要であった。それと同時に、対日早期講和が達成された場合、マッカーサーの帰国後の人生とも密接に関連していた。前述の一九四六年五月にフェラーズがリースに手紙で伝えていたように、もともと対日占領は短いほうが望ましいと判断していたマッカーサーであったが、マッカーサーの早期講和論発表のタイミングは、シャラーやションバーガーも指摘するように、また上記で紹介したフェラーズとリースや、マッカーサーとウッドのやりとりなどからもうかがえるように、大統領選を射程に入れてのものだった。しかしながら、これら同じ資料は、マッカーサーが、この終戦後の政治運動を当初から静観視しており、決して能動的に働きかけていなかったことがよくわかる。この点、ションバーガーとシャラーは、マッカー

サーが一九四八年の選挙で大統領になる意欲を誇張していたといえよう。つまり、本論文は、シャラーが論じたような、マッカーサーが、一九四七年から一九四八年にかけて財閥解体を積極的に推進しようとしたこと、また、早期対日講和論をトルーマン宣言の直後にあたる一九四七年三月一七日に行ったことは、一九四八年大統領戦出馬を第一次的に考えていたという見方ではなく、ジェームズの見方、つまり、早期講和論を論じた時点でマッカーサーは、一九四八年の大統領選出馬を決めていたのではない、という見解に近い。（ションバーガーは、シャラーの見解に近い）筆者とジェームズの違いは、マッカーサーの大統領選挙出馬への姿勢は、あくまでも一九四八年共和党大会で共和党右派と共和党穏健派双方が受け入れられる妥協候補として立候補することを要請された場合のみに応ずるというものであり、元帥がそのような見解を一九四六年五月にフェラーズとフェラーズ経由でリース共和党全国委員長に示していた、ということである。ジェームズは、前者については、明確な考察を行っておらず、後者についてはこの事実を発見していない。マッカーサーは、前述のごとく一九四六年五月フェラーズに語ったように、占領は三年から五年で終えるつもりであり、日本経済の立て直しを除き、日本で進めた主要な改革が済んだことから、米国政府に対日占領を終結させることを促したかったのであった。マッカーサーは、米国政府内で早期講和の可能性が検討されていたことを早期講和を唱える前に非公式に知っており、それもあってか、あるいは、彼の裁量権に対する彼自身の認識のためか、本国政府と事前の相談をすることなく早期対日講和を呼び掛けたのであった。マッカーサーの共和党大統領候補決定につながるから早期対日講和を主張したとは到底考えられない。占領が長引くほど占領者と被占領者の間で軋轢が増えていく歴史的傾向があることを、マッカーサーはフィリッピンの占領統治を行った父親の経験を知っていたこともあって、よく自覚していたのであった。①

マッカーサーは、自分が妥協候補としてウッドやマコーミック大佐たちに担ぎ出されていたことを、戦時中も戦後もよく認識していた。また、軍人としての職務もよく自覚していたのであった。マッカーサーが大統領擁立運動に受動的であったこともあって、この政治運動は、母体が反ニュー・ディールのアメリカ・ファースト委員会の関係者とシンパを中核

としていた特徴があったものの、政策綱領というものは存在しなかった。ただし、擁立運動は、革新主義の政治思想の流れを組んでいたということは言えよう。共和党右派は、反ニュー・ディール路線というイデオロギーを持っていたが、マッカーサーが共和党大統領候補となるには共和党穏健派との妥協以外の方策がなかったため、政策綱領をそもそも持てなかったのである。

大統領選挙戦では政治運動が幅広い支持を得られる社会運動へと発展していった場合、大統領指名争いと、指名を獲得した場合、大統領選挙が有利に展開する。フランクリン・ローズヴェルト、ロナルド・レーガン、現在のオバマ大統領は、それぞれが大統領選挙で勝利を得るにあたり、彼らを押す幅広い支持を得た社会運動が存在していた。マッカーサーの場合、ゴールドウォーターやタフトと同様、政治運動が幅広い支持を得た政治運動ではなかったばかりか、幅広い支持を得た社会運動に進展しなかった事例であった。

アメリカ・ファースト委員会の関係者の多くが、冷戦期までの米国内の外交論争で政治やマスコミの世界で活躍し、米国外交の主流派の見解に挑戦することで、米国外交の流れに一定の影響と制約を与えた。日本の真珠湾奇襲攻撃による米国の参戦で、米国内の外交論争における深刻な対立は、表面上は氷解し、終戦後は、米ソ対立に基因する反共産主義が、ウィルソン的な流れとジャクソン的な流れの緊張を緩和することになった。それでも、一九四九年、北大西洋条約機構を具体的に立ち上げる上で、トルーマン政権が一九四九年に推進した同機構加盟国への軍事援助を巡る国内政治論争は、民主党政権に対してのみならず、反共産主義の観点から民主党に協力していたアーサー・ヴァンデンバーグのような共和党右派からの転向者をはじめとする共和党穏健派に対する共和党右派の批判の台頭を招いた。一方、一九四九年夏に中国の内戦で、国民党軍が共産党軍に敗北することがほぼ確実になっていくなかで、米国政権が、対中政策の失敗を国民党政権の無能ぶりに結び付ける白書を発表すると、共和党は、国民党政権を見放すべきではないと政権批判で団結した。フーヴァーやタフトをはじめとする共和党右派の米国外交批判は、朝鮮戦争勃発後、特にマッカーサーが一九五〇年一一月に北

朝鮮軍を鴨緑江まで追い詰めた結果、中国共産党軍の介入を招いた後に、頂点に達した。また、共和党右派の国内政治と外交論争における勢力の挽回は、一九五〇年二月以降ジョセフ・マッカーシーウィスコンシン州選出共和党上院議員が国内の赤狩りをエスカレートさせる現象と相乗効果を生んだ。トルーマン大統領が一九五一年四月にマッカーサーを解任した時、全米各地で準備されたマッカーサーの帰国祝賀パレードに間に合うようマッカーサーに依頼したのは、フーヴァーの要請でマッカーサーに電話連絡したフェラーズであった。フェラーズは、マッカーサー夫人に連絡し、マッカーサーが検討していた船によるのんびりとした帰国ではなく、飛行機で米国本土に戻ることに変更することに成功したのであった。マッカーサーが米国本土の土を踏んだのは、一四年ぶりであった。その時は、フェラーズを帯同してケソン大統領とともにフィリッピンより一時帰国を行い、その間にニューヨーク市で結婚したのであった。マッカーサーは、全米各地で史上空前の凱旋帰国パレードを果たした。特に、連邦議会で歴史に残す名演説を行った直後のニューヨーク市主催のパレードは、推定七五〇万人という記録的な観衆が彼を歓迎したのであった。解任直後のギャラップ社の世論調査では、三分の二が解任に反対し、四分の一のみが大統領を支持したのであった。米国政府は、マッカーサーに終身の元帥の処遇を与えた。

共和党右派は、一九五二年の共和党の大統領候補としてタフト上院議員を選出することに失敗することで挫折した。これとともに、日本から帰国後リース共和党全国委員長の特別補佐をつとめ、また、タフト上院議員の安全保障アドバイザーをつとめていたフェラーズのこれらの役割は、アイゼンハワーのタフトに対する勝利という結末を迎えることで、幕を閉じたのであった。これは、フェラーズのアイゼンハワーとの一九三〇年代以来の因縁めいた関係にひとつの決着がついたことでもあった。②

① Schaller, *MacArthur*, 142-144, 146 ; Schonberger, 52, 64-65 ; James, *MacArthur Volume III*, 196.

② Schaller, MacArthur, 31, 37, 146-154, 241-244 ; Schonberter, 72-74, 78-81 ; Doenecke, *Not to the Swift*, Chapters 8-11 ; James, *MacArthur Volume III*, 617 ; Oral Reminiscences of Brigadier General Bonner Fellers, June 26, 1971, D. Clayton James interviewer, MML ; Folder 15, Box7, Fellers Papers, MML.

付記　本論中の資料は、フルブライト研究員としての在外研究期間（平成一七年夏から翌年夏）に収集され、論文の構想、執筆、追加の資料収集は、平成一九年度より研究代表をつとめている科研基盤研究Ｃの時期に行われている。

（名古屋大学大学院環境学研究科（情報文化学部併任）教授）

The Right-Wing Republicans and the MacArthur-for-Presidency

by

IGUCHI Haruo

This article examines the political movement among the right-wing Republicans to seek for Douglas MacArthur's nomination as the Republican Presidential candidate in 1944 and 1948.These right-wing Republicans became a minority within their own party during the Great Depression and needed a significant figure to rally around as a leader of their cause. Senator Robert Taft was their general preference but after losing his bid to secure nomination in the 1940 Republican convention, Taft chose to seek reelection in the 1944 Senatorial race. Therefore, the right-wing Republicans, many of them former America First supporters or sympathizers, focused their attention on a war hero in the Pacific, Douglas MacArthur. During the Republican Presidential nomination race of 1943-1944 and 1947-1948, the right-wing Republicans and MacArthur used each other to advance their causes; the former needed the latter to boost their political weight within the internationalist-dominated Republican party and the latter needed the former for maintaining a political clout in the pursuit of American war in the Pacific and afterwards the occupation of Japan. Using previously untapped primary sources in the Bonner Fellers Papers deposited at the MacArthur Memorial Library and the Hoover Institute Archives, this article shows the importance of the personal ties between MacArthur and Fellers in their relations to Dwight Eisenhower and the movement among the right-wing Republicans to push for MacArthur's Republican presidential nomination. Fellers acted as the major link between MacArthur and those right-wing Republicans on the home front who supported MacArthur. This article shows that the movement within the Republican party to possibly pursue the MacArthur option in 1948 began shortly after the German surrender. In examining the postwar MacArthur-for-President movement, this article shows that MacArthur was from the start not actively seeking the nomination and was willing to accept Republican presidential nomination only if the Republican convention turned to him as their candidate. MacArthur revealed that stance shortly after the occupation of Japan, much earlier than the previous works have indicated. Fellers's contacts with Carroll Reece, who in 1946 became the Republican National Committee chairman, are crucial in understanding this point. Furthermore, the long

friendship between these two men and Reece's enthusiasm for MacArthur are also very important in understanding and examining the MacArthur-for-President movement. This article also reviews the letters between MacArthur and Robert Wood, the leading figure in the MacArthur-for-President movement. Previous works have tended to overlook the fact that Wood emphasized the fact that MacArthur was their choice in case of a deadlock among Republicans and that Wood and the right-wing Republicans tended to prefer Taft as their first choice. While MacArthur probably desired privately to be the U.S. President, he was very realistic about priorities as a professional soldier in America's frontier in the Pacific.